

Departmental Bulletin Paper / 紀要論文

宣命の漢文助字について：助詞相当の助字について

池田, 幸恵

三重大大学日本語学文学. 1997, 8, p. 1-12.

<http://hdl.handle.net/10076/6513>

宣命の漢文助字

― 助詞相当の助字について ―

池田 幸恵

一、はじめに

宣命は主として、日本語の語順に従い、自立語を大書し付属語や用言の活用語尾を万葉仮名で小書きする、いわゆる宣命小書体で記されている。従つて、助詞の類は万葉仮名で小書きされるはずのものである。しかし実際に「五国史」(注一)に収められた宣命の助詞を見ると、漢文助字を用いる例や万葉仮名も漢文助字も用いず助詞を読み添える例があり、必ずしも全ての助詞が万葉仮名で小書きされているわけではない。

筆者はこれば助詞の読添えに興味を持ち、同じ奈良時代の資料である万葉集での読添えと比較しながら、「五国史」宣命の助詞表示のあり方を考察してきた(注二)。しかし、万葉仮名表記・読添えと並ぶ、もう一つの助詞表示の手段である漢文助字表記については、これまでその一部を指摘するのみにとどまり、詳しく取り上げることはなかった。

従つて、小稿では日本語の助詞に相当する漢文助字を取り上げ、「五国史」宣命での使用の実態を明らかにしたいと考える。

二、これまでの研究

宣命の漢文助字についてはこれまで考察されることが少なく、管見の及ぶ範囲では、白藤禮幸氏と峰岸明氏の論考で、一部ふれられているのみである(注三)。

白藤氏は、宣命の助詞の明示される割合を、倉野憲司氏編『続日本紀宣命』(岩波文庫)について調査し、助詞の約七〇パーセントが小書きの万葉仮名によつて示されていることを明らかにされた。そして、その中で、「さらに漢文の助辞ではあるが、「之」「者」「而」「與」「耳」「乍」「雖」「自」「從」「於」の諸字が国語の助詞とかなり対応しているので、これらをも含めると七六パーセントが明示されていることになる」と、続日本紀宣命(続紀宣命と略称)では、助詞を表示する際に漢文助字を用いる場合があることにも言及された。

また、峰岸氏は古代語の《倒置記法》という観点から、宣命や東大寺諷誦文稿・打聞集などを取り上げ、動詞・形容詞の倒置を初めとする様々な語の倒置の果たす役割を考察された。

その中で、宣命の助詞乃至助詞相当語の倒置記法の例としては、「与・於・以・従・自・依・由・因・雖」の九字を指摘し、宣命における倒置記法は、文意理解を的確に且つ容易に行うための機能を有するものであると述べられた。つまり、宣命小書体の場合「因茲天地^天」のように、万葉仮名（真仮名表記）の「天」と漢字（正字表記）の「天」が続けて用いられ、文意理解が困難になる場合がある。それを防ぐ役割を担っているというのである。

しかし、これら二つの論考は、統紀宣命における漢文助字の使用については言及されているものの、『日本後紀』以下の「四国史」宣命についてはふれられておらず、また取り上げられた助字も全てではない。

従って、小稿では、二つの論考で取り上げられた漢文助字「之・者・而・与・耳・乍・雖・自・従・於」に「耶・于・莫」を加えた一三種の助字を考察対象とし、「五国史」宣命全体での助字使用の実態を明らかにしたいと考える。

漢文助字の中には、中国での用法に従って用いられ、日本語の語順から見ると反転表記（峰岸氏の倒置記法）されているものも存する。そのため、漢文助字を反転表記されているか否かという観点からA～Cの三つに分類し、万葉仮名表記例との使い分けの有無を見ていくこととする。

また、統紀宣命の中で、淳仁・称徳期の宣命は、他の時期の宣命とは異なる万葉仮名の使用や仏典に基づく語彙の使用な

ど、特殊な性格を持つことが従来から指摘されてきた（注四）。そのため、小稿でも統紀宣命を次の①～③の三つの区分に分けて考察する（注五）。

- ① 第一詔～第二六詔
- ② 第二七詔～第四七詔（淳仁・称徳期）
- ③ 第四八詔～第六二詔

三、統紀宣命の漢文助字

統紀宣命には「付表」に挙げるように、日本語の助詞に相当する助字が一三種用いられている。

A、基本的に反転表記されている助字—自・従・与・雖・於・

于・莫

【自】「従」

自遠天皇御世内乃兵止為而仕奉来（第一七詔）

自今往前者以明直心仕奉朝廷止詔（第二〇詔）

於母自^人人乃自^門門慈賜比上賜来^家家^利利（第二五詔）

又勅^人人^今今往^前前^小小過^毛毛在^人人止^所所率^之之止^所所聞^也（第三五詔）

「ゆり」ないし「より」に当たる（注六）漢文助字には、「自」字の例が九例、「従」字の例が一例存する。「自」字の例は、「自遠天皇御世」「自今」など時間の起点を示す例が七例、「自門」など場所の起点を示す例が二例となっている。

皇朕高御座^{利由}坐初^{利由}今年^{利由}不至^{利由} (第七詔)

新政者不有本^{利由}利由行来^{利由}迹事^{利由} (第七詔)

是以^{利由}天^{利由}今^{利由}号^{利由}後^{利由}方^{利由}仕^{利由}奉^{利由}武^{利由}相^{利由}乃^{利由}来^{利由}仁^{利由}進用^{利由}賜^{利由} (第二八詔)

伊豫国^{利由}与^{利由}利由白^{利由}祥^{利由}鹿^{利由}平^{利由}献^{利由}奉^{利由}天^{利由}在^{利由} (第四六詔)

然此^{利由}多^{利由}賜^{利由}位^{利由}冠^{利由}方^{利由}常^{利由}与^{利由}利由異^{利由}在^{利由} (第三二詔)

一方の万葉仮名表記例は、「ゆり」が二例、「より」が二例存する。「より」の万葉仮名表記例には、「今より」「伊豫国より」など時間・場所の起点を示す例の他、「常より」など比較の基準を示す例もあり、用法は漢文助字より広い。

なお、「ゆり」は「より」に比べ用例数が少なく、第七詔に用いられているのみであることを考慮に入れると、助字の「自」「従」は「より」を表記したものである可能性が高い。

【与】

与^{利由}天地共長^{利由}与^{利由}日月共遠^{利由}不改常典^{利由} (第三二詔)

此^{利由}乃^{利由}舞^{利由}平^{利由}始^{利由}賜^{利由}比^{利由}造^{利由}賜^{利由}比^{利由}聞^{利由}食^{利由}与^{利由}天地共^{利由}絶^{利由}事^{利由}無^{利由} (第九詔)

* 天地与^{利由}共^{利由}長^{利由}久^{利由}遠^{利由}久^{利由}仕^{利由}奉^{利由}之^{利由}冠^{利由}位^{利由}上^{利由}賜^{利由}比^{利由}治^{利由}賜^{利由}者^{利由} (第一一詔)

「と」の「与」字五例は、全て「与天地共」「与日月共」という表現で用いられている。また、*を付した例は、一例のみであるが、本来するはずの反転表記がなされていない例である。

一方の万葉仮名表記例は五八〇例に上り、用例数では圧倒的に多い。しかし、漢文助字の用いられていた「とと共に」という表現に限ると、万葉仮名表記例は次の三例が存するのみであり、「与天地共」などの表現では漢文助字が専用されている。

体方^{利由}灰^{利由}止^{利由}共^{利由}尔^{利由}地^{利由}仁^{利由}埋^{利由}利^{利由}叙^{利由}止^{利由}名^{利由}被^{利由}烟^{利由}止^{利由}共^{利由}尔^{利由}天^{利由}尔^{利由}昇^{利由} (第四五詔)

諸臣等^{利由}止^{利由}共^{利由}仁^{利由}異^{利由}奇^{利由}久^{利由}麗^{利由}白^{利由}衣^{利由}形^{利由}平^{利由}尔^{利由}毛^{利由}見^{利由}喜^{利由} (第四六詔)

【雖】

如此^{利由}雖^{利由}在^{利由}慈^{利由}賜^{利由}止^{利由}為^{利由}而^{利由}一^{利由}等^{利由}輕^{利由}賜^{利由}而^{利由}姓^{利由}名^{利由}易^{利由}而^{利由} (第一九詔)

故^{利由}是以^{利由}御^{利由}命^{利由}坐^{利由}勒^{利由}入^{利由}朕^{利由}者^{利由}拙^{利由}劣^{利由}雖^{利由}在^{利由}親^{利由}王^{利由}等^{利由}平^{利由}始^{利由}而^{利由} (第一四詔)

故^{利由}是以^{利由}大^{利由}命^{利由}坐^{利由}勒^{利由}朕^{利由}雖^{利由}拙^{利由}弱^{利由}親^{利由}王^{利由}始^{利由}而^{利由} (第四八詔)

「ども」には「雖」字の例が五例存する。その中四例が「朕雖拙弱」など即位宣命での謙遜の表現の例である。

仏^{利由}乃^{利由}御^{利由}袈^{利由}裝^{利由}平^{利由}服^{利由}天^{利由}在^{利由}止^{利由}国^{利由}家^{利由}乃^{利由}政^{利由}平^{利由}不^{利由}行^{利由}止^{利由}阿^{利由}羅^{利由}不^{利由}得^{利由} (第二八詔)

官位^{利由}昇^{利由}賜^{利由}治^{利由}賜^{利由}可^{利由}久^{利由}方^{利由}止^{利由}毛^{利由}仲^{利由}麻^{利由}呂^{利由}毛^{利由}和^{利由}氣^{利由}毛^{利由} (第三四詔)

天^{利由}高^{利由}止^{利由}聰^{利由}卑^{利由}物^{利由}止^{利由}曾^{利由}詔^{利由}天^{利由}皇^{利由}教^{利由}御^{利由}命^{利由}平^{利由}衆^{利由}聞^{利由}食^{利由}止^{利由}宣^{利由} (第五九詔)

一方の万葉仮名表記例は二四例存する。用例数では万葉仮名表記例の方が多いものの、先に見た即位宣命の「朕雖拙劣」という表現の場合には、漢文助字が専用されており、万葉仮名表記例はない。

また、仮定条件を表す「ども」には「雖」字の例はなく、万葉仮名表記例のみが五例存する。

額^{利由}尔^{利由}方^{利由}箭^{利由}立^{利由}止^{利由}毛^{利由}背^{利由}箭^{利由}方^{利由}不^{利由}立^{利由}止^{利由}云^{利由} (第四五詔)

【於】【于】

賀^{利由}久^{利由}詔^{利由}者^{利由}挂^{利由}長^{利由}又^{利由}於^{利由}此^{利由}宮^{利由}坐^{利由}仁^{利由}現^{利由}神^{利由}大^{利由}八^{利由}洲^{利由}国^{利由}所^{利由}知^{利由} (第七詔)

吾^{利由}子^{利由}為^{利由}皇^{利由}太^{利由}子^{利由}止^{利由}定^{利由}仁^{利由}先^{利由}奉^{利由}昇^{利由}於^{利由}君^{利由}位^{利由}畢^{利由} (第二五詔)

* 又^{利由}於^{利由}天^{利由}下^{利由}政^{利由}置^{利由}而^{利由}独^{利由}知^{利由}物^{利由}不^{利由}有^{利由} (第七詔)

无^{利由}位^{利由}大^{利由}舍^{利由}人^{利由}等^{利由}至^{利由}于^{利由}諸^{利由}司^{利由}仕^{利由}丁^{利由}尔^{利由}麻^{利由}大^{利由}御^{利由}手^{利由}物^{利由}賜^{利由}天^{利由} (第一三詔)

表施其門至于終身田租免給(第四二詔)

「に」の漢文助字「於」「于」は右に挙げた五例が全てである。
*を付した例は「天下政においては」という表現であり、本来「於」字のみで「に」においての意味があるにも関わらず、「天下政」の下に「置」という漢字が存する。日本語の助詞「に」に「於」字が相当するという意識が強いために、このような表記になっていると考えられる。

また「于」字の例は二例とも、漢文的要素の強い宣命後半の授位の記事で用いられている。

「に」の万葉仮名表記例は五四四例に上り、漢文助字の用いられていた「に」に「坐す」「に至る」という表現に限っても多くの万葉仮名表記例が存する。

高御座^亦坐而此食^亦天下^平撫賜^比(第三詔)

国々宰等^亦至^亦国法^平過犯事無^久(第一詔)

天皇御世^平始^中今^亦至^亦(第一三詔)

【莫】

又云^久過^知天^方必改^身能得^平莫忘^止伊布^天(第四五詔)

終助詞「な」に「莫」字が用いられているのはこの一例のみである(注七)。

一方の万葉仮名表記例は五例存する。

我兒我王過^平無罪無有者捨^亦忘^亦負賜^止(第七詔)

此辞忘給^亦弃給^止宣^比大命^平(第一三詔)

B、反転表記されていない助字——而・者・之・耶・耳
次のBは反転表記されていない助字の例である。

【而】

故如此之状^平聞食悟而^止(第一詔)

建内宿祢命乃仕奉^亦事止^亦同事止^亦勅而^止治賜慈賜^利(第二詔)

然後廢帝四王之中^亦簡而^止為君^止謀而^止(第一九詔)

早良親王立而^止皇太子止^止定賜^亦(第六〇詔)

まず「て」の「而」字は統紀宣命全体で二三二例に上り、Aの反転表記されている助詞に比べかなり用例数が多い。また用例も「悟て」「勅て」「立てて」など、万葉仮名表記例と共通するものも多く、ほぼ「て」の万葉仮名と同様に用いられている。両者の違いは、②区分では漢文助字の例が見られないという点である。

女子乃繼^亦在^止欲令^止宣^比比政行給^亦(第二七詔)

衆諸如此乃状悟^亦清直心^知此王^平輔導^天(第五九詔)

加久為^止今帝止^止立^止須麻^比久流間^亦(第二七詔)

また「而」字の例の中には、一例のみではあるが、接続助詞「ども」の例も存する。

然不会謀庭亦不被告而緣道祖王者配遠流罪(第二〇詔)

【者】

汝藤原朝臣乃仕奉^亦状者今乃^亦不在^止(第二詔)

此乃天皇日嗣之位者^亦大命^亦坐^止大坐坐而治可賜^止(第三詔)

今年六月十五日^亦詔命者受賜^止白^亦(第三詔)

此之仰賜^比授賜^夫食國天下之政者^{（第二四詔）}

「は」の「者」字には「位は」「政は」など万葉仮名表記例と共通する例もあり、「而」字と同様に②区分に用例が見られ難い他は、万葉仮名とほぼ同様に用いられていると言える。

大命坐詔^久美麻志大臣^乃仕奉來狀^不今耳^{（第五二詔）}

此位^乃天地^乃置賜^比授賜^者位^在（第三三詔）

天下^乃政^行給物^乃伊麻世波^{（第四四詔）}

また、「者」字の例の中には、接続助詞「ば」の例が一一例存する。その中、仮定条件を示す例が五例、確定条件を示す例が六例であり、「者」字は仮定条件と確定条件のいずれにも用いられている。

被賜仕奉者拙^久劣而無所知^{（第五詔）}

今皇朕御世^尔当而坐者^{天地之心}（第四詔）

【之】

天皇御子之阿礼坐^乃弥繼繼^尔（第一詔）

故如此之狀^乎聞食悟而^{（第一詔）}

此食國天下之業^乎日並所知皇太子之嫡子^{（第三詔）}

右大臣之位授賜^止勅^布天皇^親御命^乎諸聞食^止宣^{（第四一詔）}

「の」「之」字は「而」「者」に次いで多く用いられ、②区分で用いられ難いことも両助字と共通している。

格助詞「の」は主格でも連体格でも用いられるが、漢文助字の場合は連体格の例が圧倒的に多く、主格の例は用例に挙げた第一詔の例を含め、わずか五例に過ぎない。

四方食國天下^乃政^乎弥高弥広^尔（第五詔）

又天日嗣高御座^乃業^止坐事^{（第一三詔）}

本乃大臣^乃位^在仕奉^之事^{（第二八詔）}

用例数では万葉仮名表記例の方が三六二例と圧倒的に多い。また次の例は万葉仮名表記例と比較すると、格助詞「が」の例であると考えられる。「之」字が「が」を表しているのは、続紀宣命ではこの連体格の一例のみである。

大瑞^聖皇之御世^尔至德^尔感^天（第四二詔）

天津宮^上天下所知^行之天皇^親御世^尔（第四〇詔）

【耶】

問來政^乎者加久耶^答賜加久耶^答賜^止白賜官^尔耶治賜^止白賜倍婆^{（第六詔）}

于都斯久母皇朕政^乃所致物^尔在^来耶^{（第六詔）}

「や」の「耶」字は四例存するが、その四例全てが第六詔で用いられている。

男^親父名負^主女^親妻伊婆^乃阿礼^尔（第一三詔）

可絶其家門^止為^此般罪免^給（第二〇詔）

自今日者大臣之奏之政者不聞看^成（第五一詔）

一方の万葉仮名表記例は一六例に上り、漢文助字のように用いられる宣命に偏りはなく、①区分③区分の全ての区分で用いられている。

【耳】

広厚慈而奏事此耳^{不在}（第五一詔）

美麻志大臣乃仕奉来状不今耳（第五二詔）

「のみ」の「耳」字の例は右の二例であり、二例ともが「のみにあらず」という文脈で用いられている。

汝藤原朝臣乃仕奉状者今不不在（第二詔）

此皇后位不授賜然毛朕時不不有（第七詔）

此不念方唯己独不朝廷乃勢力不得（第二八詔）

一方の万葉仮名表記例は一八例存し、「のみにあらず」という文脈以外でも用例が見られ、用法は漢文助字より広い。

このBの反転表記されていない漢文助字の中には「而」「者」「之」など、かなり用例の多い助字も見られる。これらの助字は中国でも反転表記されない助字であり、日本語の語順に従い、日本語の助詞として用いることに違和感がなかったものと思われる。

C、その他――

【乍】

「乍」字は、統紀宣命では反転表記されない助字であったのが、「四国史」宣命では反転表記されるようになり（第四節参照）、統紀宣命と「四国史」宣命では用法が異なるため、「その他」に分類している。

統紀宣命では「乍」字は「つつ」を表していると考えられる。

此乃食国天下之政不行賜數賜乍供奉賜間不（第六詔）

頂不恐不供奉不夜半曉時不休息事無不（第七詔）

厨真人厨女許不竊往不岐多奈不惡奴不相結（第四三詔）

「乍」字の例は右の三例が全てであるが、動作が平行して起こるさまを表すこと自体が日本での用法であり、またいずれの例も本来するはずの反転表記がなされておらず、万葉仮名のよいうに小書きされる例があるなど（第七詔）、助字としての用法には適っていない。

意中不昼不夜不倦不怠不无不久不謹不礼不比不末不仕奉不侍不利（第四一詔）

又侍諸人等不共見不天不恠不喜不在間不（第四二詔）

又詔不如此時不当不人々不不好謀不懷不（第五九詔）

一方の万葉仮名表記例は一一例存する。

このように、漢文助字が用いられる助詞は、万葉仮名でも表記され得るものばかりであり、峰岸氏もすでに指摘されているように（注八）、仮名で表記し難いために漢文助字が用いられているわけではない。また初期の宣命である①区分に最も多くの例が存し、次いで③区分となっており、②区分の淳仁・称徳期の宣命ではごく少数の例が存するのみである。

反転表記されず、用例数も多い「而」「者」「之」を除き、漢文助字は用例数がかなり少なく、特定の宣命や特定の表現に偏る傾向がある。また、中には「与」字のように本来するはずの反転表記がなされていない例や、「乍」字のように小書きされる例なども見られた。

これらの漢文助字が、統紀宣命より時代の下った「四国史」

宣命ではどのように用いられているのかを、次に見ていくこととする。

四、「四国史」宣命の漢文助字

A、基本的に反転表記されている助字——目・從・与・雖・於・

于

【目】【從】

因茲藥子者官位解_目自_目宮中退賜_目（後紀・第七一詔）

自_目今以後如此_目辭申事不得_止宣_目（統後・第八五詔）

自_目此之外_目物佐亦多_目（統後・第九一詔）

*朕躬劣弱_目洪業_目不耐_止本_目自思畏_目賜_目許_目暫_目不_目息_目

（後紀・第六九詔）

昔延曆年中渡海求法三密教門從_目此發揮諸宗之中功無與_目

（文德・第一四一詔）

統紀宣命では「ゆり」の万葉仮名表記例も見られた（注九）

が、「四国史」宣命では「より」のみであり、助字「目」「從」は「より」を表したものであると考えられる。

「目」字は「四国史」宣命に至っても多用される漢文助字であり、用例には「今より」「去年より」と時間の起点を示す例が多い。*を付した例は、「目」字が反転表記されていない「四国史」宣命唯一の例である。

「より」の漢文助字表記例と万葉仮名表記例を比較してみる

と、「今より」「此より」など起点となる時が、漢字一字ないし二字で表される場合は漢文助字が用いられる割合が高く、逆に「久き世時より」「幼少に御坐時より」など音節数が多くなると万葉仮名が用いられる傾向がある。このような万葉仮名との使い分けが存するために、「より」の「目」字は「四国史」宣命でも多用されたのであると考えられる。

「從」字の例は用例に挙げた一例のみである。この文徳実録・第一四一詔は、真濟大法師の上表文に基づいて作成されており、全体的に漢文的な色調が強く、多くの反転表記や漢文助字の見られる特殊な宣命である。

【与】

又續日本紀所載_目崇道天皇與_目贈太政大臣藤原朝臣不好之

事皆悉破却_目賜_目（後紀・第七一詔）

石兵零_目破却_目賜_目（後紀・第七一詔）

（統後・第九〇詔）

天皇朝廷_目与_目日月共_目常磐堅磐_目夜守日守_目護幸奉給_目

（三代・第一五九詔）

「与」字は人物や事柄の並列を表す例の他は、いずれも「与日月共」「与天地共」という表現の例である。統紀宣命では反転表記されていない例が一例存したが、「四国史」宣命では全て反転表記されている。

【雖】

多入鹿等申_目雖_目言不納_目雖_目諫争_目已_目懇至_目（後紀・第七二詔）

所願^ま以僧正号將讓于先師者雖知師資其志既切而在於朕情未有許容（文德・第一四一詔）

故是以大命坐宣^入朕雖拙幼親王等始^正（統後・第七九詔）

「雖」字は「四国史」宣命に七例存するが、万葉仮名「止毛」と共に用いられている日本後紀・第七二詔と漢文的な色調の強い文徳実録・第一四一詔の例を除き、いずれも統紀宣命に見られた即位宣命の「朕雖拙劣」という表現での例であり、用法は限られている。また、仮定条件の「とも」の例はない。

【於】【于】

所願^ま以僧正号將讓于先師者雖知師資其志既切而在於朕情未有許容（文德・第一四一詔）

賢臣乃保佐^尔賴^天得至於今日^利（三代・第二〇四詔）

自去年至于^于今月天變地灾不止（三代・第一五五詔）

「に」の「於」「于」は合わせて五例存し、その中三例が「に至る」という表現の例である。

また、次に挙げる二例は、万葉仮名表記例と比較してみると、「までに」の例であると考えられる（注一〇）。

皇太子乃成人^平待賜止爲^天于今^經數年^留

（三代・第二〇四詔）

宮内に相仍^天穢事依有^于于今延忘^利（三代・第一六〇詔）

而大臣乃懇^尔加志許^利辭讓申^上依^天今^來延來^利

（三代・第二二〇詔）

Aに含まれるこれらの助字は統紀宣命でもごく少数しか用

いられなかったものであるが、「自」字を除き、「四国史」宣命でも漢文的な色調の強い宣命や特定の表現でのみ用いられており、用法も統紀宣命とあまり変化は見られない。

B、反転表記されていない助字——而・者・之

【而】

中務卿諱^平立而皇太弟止定賜^者（後紀・第七三詔）

道康親王^平立而皇太子止定賜^者（統後・第一〇一詔）

大御座處^平掃潔侍而天之日嗣^平戴荷^如（三代・第二〇五詔）

「而」字は「四国史」宣命では用例が激減しており、助詞「て」は、ほぼ万葉仮名で表記されるようになっていた。その中で「而」字が用いられるのは、統紀宣命でも見られた、立太子宣命での「立てて」などに限られている。

その一方で、統紀宣命では見られなかった、「而已」と熟して「のみ」を表す例が一例用いられている（注一一）。

朕而已^尔此^平喜^爾卿太百官人^毛止（統後・第九五詔）

朕躬^乃此^平嘉^爾親王等諸王等諸臣等百官人^毛止

（三代・第一四九詔）

【者】

藥子者^官解^止自宮中退賜^比仲成者佐渡國權守退^止宣

厚慈^平蒙^戴天之日嗣^政（統後・第七八詔）（後紀・第七〇詔）

天之日嗣^乃政者^平入天地日月止共^尔（文德・第一二三詔）

「者」字も「而」字と同様、「四国史」宣命では用例が激減しており、助詞「は」も、はば万葉仮名で表記されるようになってゐる。また、一例のみであるが続日本後紀・第七八詔では「者」を万葉仮名のように小書きした例が見られる注二二。また、「者」字が接統助詞「は」を表している例は「四国史」宣命では三例存する。これらはいずれも仮定条件の例であり、確定条件の例はない。

有犯死罪已下者順罪^正行^止之節刀給^入詔（統後・第八一詔）

又中納言藤原朝臣葛野麻呂^家惡行之首藤原藥子^加姻嬖之中^奈重罪有^志（後紀・第七二詔）

應機兵庫等上^上依有大鳥之^佐惟^天ト求^求隣國乃兵革之事可在^止ト申^利（三代・第一七七詔）

良佐乃翼戴^家皇太子乃大成^已何遠^之有^事止^念行^行

（三代・第二〇四詔）

*而更依人言^正破却之事如本記成此^毛亦无礼之事^利

（後紀・第七一詔）

「之」字は「而」「者」とは異なり「四国史」宣命でも多くの用例が存する。「之」字の用例数が「四国史」宣命、中でも三代実録宣命で多いのは、事件の記録的な要素の強い、応天門の変についての宣命や新羅海賊についての一連の宣命で、「大鳥之^佐惟^天」「兵革之事」など多用されているためである。また、*を付した日本後紀・第七一詔のように「やぶりすつること」

「みやなきこと」など、不読の例に「之」が用いられていることも、他の助字に比べ「之」が用いられやすかったことを示していると言えよう。なお、「之」字の例のほとんどが連体格の例であり、主格の例は三代実録・第二〇四詔に一例存するのみである。

また「之」字が「が」を表している例は、「四国史」宣命では三例存する。これらはいずれも連体格の例である。

藤原基經朝臣^家朕之親舅^利（三代・第二二〇詔）
唯此太子一人^乃朕^家子^在（統紀・第四五詔）

C、その他「乍」

【乍】

乍^乍驚問求^求早疫之災及兵事可有^止ト申（統後・第九一詔）

御陵内^内斫樹^留事在^利此^平乍^乍聞食恐畏^天萬利^利御陵司^平法隨^利勘^利

賜^比（統後・第一一二詔）

*乍^乍神^毛聞食^天平久安^久護惠助給（三代・一六〇詔）

*去十八日不慮之外^外野火進引^天御陵^平焼損^利介聞食^利加^加驚怪懼^畏畏^止無限^量（三代・一六九詔）

「乍」字は統紀宣命では反転表記せず「つつ」として用いられていたが、ここでは*を付した例から「ながら」を表していると見られる。統紀宣命では反転表記されていない「乍」字が、「四国史」宣命では七例が全てが反転表記されているのも、表している助詞が、統紀宣命では「つつ」、「四国史」宣

二 拙稿「宣命の「を」格表示」（『待兼山論叢』第三〇号、文学編、平八・一二）、拙稿「宣命の助詞表示」（大阪大学『語文』第六八輯、平九・五）

三 白藤禮幸氏「古代の文法Ⅰ」（『講座国語史第四巻 文法史』第二章、昭五七、大修館書店）、峰岸明氏「古代日本語文章表記における倒置記法の諸相」（『国語論究』二、平二、明治書院）

四 長尾勇氏「『統紀宣命』についての研究—かなの用字法を中心として—」（『日本大学文学部研究年報』一、昭二六）、小谷博泰氏『木簡と宣命の国語学的研究』（昭五二、和泉書院）など。

五 この淳仁・称徳期の宣命の範囲については、孝謙天皇の時期のものまでを含めて考える説もあるが、小稿においては、冲森卓也氏が「続日本紀宣命の表記と文体—称徳期について—」（松村明教授還暦記念『国語学と国語史』昭五二、明治書院）で示された区分に依ることとする。

六 時間・場所の起点を示す助詞の万葉仮名表記例には、「ゆり」「より」の他「ゆ」の例も三例存する。しかし、「ゆ」の例は全て「高天原_ニ天降坐_ニ天皇御世_ヲ始_メ而（第四詔）」という表現での例であり、「自」「從」の例の中には助詞「ゆ」を表記したものはないと思われる。

七 「莫」字には、副詞の「な」や形容詞「なし」の例も、一例ずつ存する。

今往前然莫_レ為_レ宣（第一八詔）

人_ヲ伊佐奈比_ニ莫_レ（第三二詔）

八 峰岸氏注三論文。

九 注六参照。

一〇 「于」字は「まで」を表記したものである可能性も存する。

「まで」と「までに」は、奈良時代には「までに」の方が多用されていたが、平安時代に入ると、和文ではその勢力が逆転し「まで」がほぼ専用されるようになる（桜井定夫氏「『まで』『までに』考」、『文学論叢』第六号、昭三二・二）。しかし、平安初期の訓点資料では未だ「までに」の方が優勢となっている（小林芳規氏「古代の文法Ⅱ」（『講座国語史第四巻 文法史』第三章、昭五七、大修館書店）。

「四国史」宣命の場合、万葉仮名表記例は、「まで」九例に対し「までに」は一二例であり、「于」字がどちらを表記したものであるかを判断するのは難しいが、「まで」の例は全て「_レに至るまで」という表現の例であるため、「于今」の「于」字は「までに」を表記したものであると思われる。

一一 これらの他、「雖—而」という用例が一例存するが、この場合は「而」字は不説であるため用例数に入れていない。

雖知師資其志既切而_レ在於朕情未有許容（文徳・第一四詔）

一二 「者」字を万葉仮名のように小書きする例は、この例の他『朝野群載』の宣命例文や、公卿日記の中に収められた宣命などにも見られる。

一三 「四国史」 宣命で新たに用いられるようになる助字には「矣」

字がある。しかし「朝夕煩懣念^{（前件）}久矣」（統後・第七六詔）と

「矣」字は不読であるため用例には含んでいない。

・テキストには、続日本紀宣命は北川和秀氏編『続日本紀宣命 校本・総索引』（昭五七、吉川弘文館）を用い、訓読は北川氏の訓読文を参考にしつつ私に行った。「四国史」宣命は『^{（前件）}四国史大系』を用い、私に訓読を行った。なお、「四国史」宣命の詔番号は、馬場治氏「五国史所載宣命の国語史的研究」（『^{（前件）}colos

』一一号、平五・二）

【付表】

A							
	自	從	与	雖	於	于	莫
統紀	9	1	5	5	3	2	1
後紀	4	0	1	1	0	0	0
統後	10	0	5	1	0	0	0
文徳	0	1	1	2	1	1	0
三代	26	0	5	3	1	4	0
合計	49	2	17	12	5	7	1

B					
而	者	之	耶	耳	
133	88	69	4	2	
2	6	6	0	0	
4	4	20	0	0	
1	2	10	0	0	
4	2	131	0	0	
144	102	236	4	2	

C	乍
3	
0	
3	
0	
4	
10	

統紀	9	1	5	5	3	2	1
①区分	4	0	5	3	3	1	0
②区分	2	1	0	0	0	1	1
③区分	3	0	0	2	0	0	0

133	88	69	4	2	
114	61	32	4	0	
0	1	7	0	0	
19	26	30	0	2	

	3
2	
1	
0	

〔大阪大学大学院生・一九九三年三月卒業〕